

故 村瀬 豊 教授を偲んで

スポーツ健康学部長 山 本 親

大学院修士の2年目、修士論文の作成に没頭し、ほとんど就職活動をしていなかった。そんな私に、指導教官の益子詔次先生より「名古屋学院大学から募集の話があるけど、どうだ」と尋ねられ「お話を聞かせてください」とお願いしたのが、本学へ来るきっかけであった。その話を益子先生へ持ってこられたのが村瀬先生であったことを後に知った。

振り返ってみると就任してからの33年間、ズーッと村瀬先生の後ろ姿を追いつけてきた。教育・研究から教員人生のあり方、さらに趣味までと、私の人生の大方を方向付けしていただいたようなものであった。

新卒で5人目の体育の教員として名古屋学院大学へ赴任したのが、昭和52年4月、私の次に若い体育の教員としておられたのが村瀬先生であった。先生は、私が大学研究室の直接の後輩であったためか、とても親切にしてくださり、大学という組織について、また授業方法、学生との接し方、研究と様々なことについて機会あるごとに指導してくださった。赴任して2・3週間目の頃、名古屋大学保健体育科学センターで毎週行われていた「火曜会」という研究会へ連れて行ってくださった。1970年代に東大名誉教授宮下充正先生や、お亡くなりになられた名古屋大学名誉教授の松井秀治先生らが中心になって立ち上げた研究会である。東京教育大学の修士を終えた私は、プライドを持って、意気揚々と研究会へ出席した。しかしそのプライドは最初の研究会で一瞬にして打ち砕かれた。学部や大学院の授業・研究を通して1回も聞いたことのなかった数多くの専門用語が頻繁に飛び交い、さらに国際学会での発表とそのレベルの高さに圧倒され、ショックを受けたことを鮮明に覚えている。研究会のメンバーの何人かがフィンランドのユベスキュラで行われた国際バイオメカニクス学会で発表され、当時30歳の村瀬先生も発表者のお一人であった。先生は「研究は国内ではなく、海外を意識してやりなさい」と、おっしゃっていたのをよく覚えている。7年後、私がセントルイスのHolloszy教授のところへ留学できたのも先生のそうしたアドバイスのお陰と感謝している。

私が感じている先生の生き方は、「おしゃれな人生」という言葉が最適ではないかと考える。先生の多趣味は有名で、株の売買を筆頭に、鍼、陶磁器の鑑賞・収集、絵画鑑賞と収集、旅行、ゴルフ、スキー、紅茶、ジャム、スコーンさらには金継など、とにかく幅広かったことを思い出す。忘年会や歓送迎会の席で「今10の興味あることをあげると……」というお話をお聞きになられた方は、経済学部、人間健康学部の先生方の中には多いはずである。私は特に絵画と陶磁器について影響を受け、浮世絵の収集・研究やヨーロッパ磁器のコーヒーカップのコレクションなどはその典型である。「肉筆は高くて手が届かないけど、版画ならその10分の1くらいで手に入

りますよ。」と、私にアドバイスしてくださったのをよく覚えている。そう言いつつも、先生はその直後、北川民次画伯の水彩画を購入されていたのは意外であった。この絵は、ご遺族の希望で現在、スポーツ健康学部長室を飾っている。

本学のサッカー部を連れてイギリス遠征を行うことになった時「コベントガーデンにあるTHE TEA HOUSEへ行って、ルイボスティーを買ってきてください。」と頼まれた。なぜコベントガーデン？ なぜルイボスティー？と、当時は不思議であった。このお店は、世界中のお茶を販売している有名なお茶屋さんで、中でもルイボスティーは逸品であるとガイドブックにあり納得した。

身につけているジャケット、靴、ネクタイ、ペンとどれもこだわりがあった。オーダーメイドのイタリア製の靴、10年以上使って見えたクロスのスターリングシルバーのボールペンは印象的であった。また旅する先も、国内の古くからある老舗旅館と温泉、海外ではゴルフ場、スキー場、美術館や名所・旧跡に加え、ヨーロッパ陶磁器のマイセンやストークオントレントへまで出向いてみえたのには驚かされた。学生のころは学生選抜でヨーロッパ遠征へ行ったり、箱根駅伝で活躍したりと、人生そのものが本当におしゃれに見える。

79年の夏、アメリカからヨーロッパへと一人旅をした際、先生は丁度在外研修でペンシルバニア州立大学へ留学中であった。約1ヶ月間、私はそこへアパートを借りて滞在した。その時、バイオメカニクスのネルソン教授のラボで、留学中の現在筑波大学教授をしてみえる阿江先生やその大学院生をご指導されていたのを覚えている。そんな先生の姿を見て、バイオメカニクスの研究に関してのレベルの高さを再認識したものであった。現在、阿久比のスポーツ医科学研究所長をされている横江清先生や日本のスキージャンプの向上に貢献され広島大学で定年を迎えられた渡辺和彦先生も留学中で、週末にはパーティーを企画、さらにネルソン教授の家族を含めテニスをし、また、ゴルフを楽しんでおられた。

先生はいつも他人のことを気にかけ、いろいろと気遣いされていた。本学の理念である「敬神愛人」を堅実に実践されていた。ご高齢の教授の先生をご自宅や駅までお送りしたりするのは常で、還暦の祝いなどの会を企画したりもされていた。また徳川美術館をはじめ、いろいろな機関や機会に寄付をされていたことを知ったのは大分後であった。鍼に関しても体調の悪い方や慢性の腰痛や膝痛など、多くの方を治療されていた。時にはコミュニケーションを図るために私たちのお昼のサンドイッチまでと、ほんとに心配りの広い方であった。3年前に人間健康学部がスポーツ健康学部へ改組、福祉コースの無くなることが決められた時、理事長のところへ福祉担当教員の処遇について頻繁に交渉に行かれていたことは鮮明に記憶している。

このスポーツ健康学部の立上、そして始まってからの1年は、先生の身に様々なトラブルが襲ってきた。まさに想定外の出来事で、先生の学部構想が大きく歪められ、その修正のためどれほどのご苦労をされたか、想像もつかなかった。特に、人事に関しては、村瀬先生の構想とは全く別の方向へ進み、いつも悩みを溢されていた。

現在の私があるのは、すべて先生のお陰といっても過言ではない。そのお礼を申し上げるチャンスも無く、あっという間に先生は遠くへ去られてしまった。苦痛に顔を歪められた2月の中旬、

もっと先生のお力になれたはずなのに、本当に悔やまれる。先生の心境、体調を十分に察することができず、全く無力であったことを後悔している。日本私立大学連盟から出版された大学時報334号（2010年9月刊行）に「学生の夢の実現を目指して」というタイトルで学部長として先生の手書かれた文章が掲載されている。その終りに「きめ細かい教育をして人間力を高め、彼らの将来の夢が実現するような学部を育てていかなければならない。」とある。この村瀬先生の遺志を汲んで、このスポーツ健康学部を完成に導くことが我々スタッフの使命であると思う。学部完成の暁には、先生の墓前にご報告に上がる所存である。それまで、私たちスタッフを見守ってくださっていると確信する。



村瀬先生の好きな画家、北川民次画伯の水彩画（ご遺族より遺贈）



村瀬先生と交友の深かった伊藤伊平先生の染付葡萄紋花瓶（ご遺族より寄贈）



瀬戸の窯の風景 染付（ご遺族より寄贈）